

障害をもつ子どもの父親の育児意識（その2）

恒次 欽也¹⁾

1. 問題及び目的

障害児をもつ家庭においては、その子どもに対して、家庭の中の誰かが密着した状態で教育・療育に関わっていく必要がでてくる。そしてその役割は、乳児期の授乳者である母親が担うケースがほとんどとなるが、母親は心理的あるいは社会的に様々な悩みや不安を抱くようになり、本来の親としての養育にも問題が生じてくる傾向がある。

こうした不安定な母子関係をとりまくなかにあって、日々の養育において母親を精神的に支え励まし、時には家庭での養育者としての父親の存在はかなり重要な位置を占めるようになってくると考えられる。

瀬谷ら（1986）は、障害を持つ子どもの母親の育児意識についての研究を行い、そこではその意識の根底には父親のあり方が深く関連している、母親の育児行動を規定していると推測された。それから発展した障害児を持つ父親像の研究（1988）では、母親の様子を外から見守るという父親像が浮かんできた。しかし、それは父親の具体的な養育態度や、母親との関連までを対象としたものとはなっていない。また、従来の研究では父親は父親の、母親は母親のそれぞれの育児観や育児行動をたずねているものが

1) 愛知教育大学

ほとんどである。これに対して本研究では父親の方にターゲットを置いて、父親は自己評価をし、母親は父親（夫）がどうであるかの他者評価を求めることにした。これにより一層、父親像が明確になると期待される。

さらに、今年度の研究では、前年度の報告から質問項目を再検討して、両親の現在の精神状態、子どもの状態、両親が子どものことで相談できる具体的な人物や人数等を質問項目に加えた。障害児を持つ父親の子育てについての父母の回答の一致性、回答の傾向を検討することにより、養育活動がどのように行われ、なにが問題になっているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象

調査対象者は、N市立M養護学校に通う小学部36名、中学部27名、高等部54名の生徒の両親125組250名と、A県立N盲学校に通学する小学部29名、中学部14名、高等部23名、その他8名の両親66組132名の合計191組382名である。父親の平均年齢43.8歳（SD6.4歳）、母親は41.1歳（SD5.1歳）で、対象児は14.3歳（S

D6. 6歳)であった。生徒児童の内訳は、男子112名、女子69名、不明10名で、障害種別では、精薄(染色体異常含む)34名、自閉症37名、てんかんなど54名、視覚障害53名、盲精薄13名であった。なお、結果の分析にあたっては、小学部の1年生、2年生、3年生を低学年、4年生、5年生、6年生を高学年とした。また、予め学校種別による差をカイ自乗検定により各質問項目について行ったところ有意差はほとんど認められなかったため、両校とも一緒に検討することとした。

2. 2 質問項目の作成

総務庁青年対策本部が1986年に実施した「子どもと父親に関する国際比較調査」、および瀬谷らが1985年に実施した「障害小児を持つ母親の育児意識 その6」と同じく1987年に実施した「障害小児の父親像 その1」と我々が1990年実施した前年度アンケートを参考にして、質問項目を設定、作成、実施した。質問項目の概要は以下の通りである(詳細は別紙参照)。

- ①父親と子どもとの具体的な接触行動の程度(朝夕食、お風呂、外出等)。
- ②父親の育児観や父親観。
- ③父親自身の現在の精神状態、相談相手。
- ④子どもの現在の状態。
- ⑤妻の養育態度や育児、精神状態、などである。

なお、母親への質問は、母親自身と共に母親からみた父親の子育て、精神状態等についてたずねることとした。

2. 3 手続き

質問紙はクラス担任に配布を依頼し、子どもの父母に回答を求めて、約一週間後に回収した。なお、質問紙は、父親用、母親用それぞれ別々の封筒に入れたものを配布し、回収の際には再度各封筒に入れ、滅封の上提出してもらった。

また、封筒の表には両親が互いに相談したり、見せたり、代筆したりすることのないように留意事項を記載した。

3. 結果と考察

得られた資料の中から主要な結果を報告する。

1) 父親と母親の回答の一致度

表1に各質問項目に対する父親と母親の回答率を算出し、同一項目間での父親と母親の回答の一致の程度をケンドールの一致係数により検定した結果を示した。これによると「Q9母親の子育て」「Q11子育ての目標」を除いてはいずれの項目も5%以下の有意水準で高い一致係数が得られた。つまり、父親の自己評価と母親による父親(夫)評価はおおよそ一致しているといえる。表1にみられるようにほぼ父親と母親の反応傾向が類似していることから推測される(この類似性は一致性とは異なる)。

「Q9母親の子育て」での不一致は身の回りの世話と、しつけをするに夫婦間の見解が分かれる場合が多いためである。つまり、母親自身は子育てを身の回りの世話と思っけていても父親の方は母親の役割としてはしつけの方を求めているということが、または、その逆のことが、しばしば生じているということになる。このことは、夫婦間の対話不足によるものかは不明であるが、役割分担や役割意識にズレを引き起こしているとはいえる。場合によっては家庭内の問題が生じる要因となる可能性がある。「Q11子育ての目標」での不一致は両者の価値観の相違という程度のもので、父親が健康を第一とし、幸せを願っている。他方、母親は健康だけでなく子どもと楽しく、子どもを理解したいであり、これらは父親が非日常的、抽象的な目標をあげているのとは異なり、日常的に子どもと接している母親が子どもと共に生活していく視

点からの目標といえる。

2) 父親と母親の回答の傾向

「Q1 休日の過ごし方」では父親が思っているよりは母親は子どもの相手や家族サービスをしていてと評価しているようである。

「Q2 子どもとの接触の程度」は子どもとの会話を除いては母親の評価の方が父親の自己評価よりもやや接触が少ないとみている傾向がある。食事、会話、お風呂などは週に数回程度以上はしているが、勉強、スポーツ、外出、「Q4 旅行」など手間暇のかかることは敬遠しているようで、母親が評価しているのはそういった手間暇のかからない部分でのことようである。

「Q5 お相手の積極さ」は自己評価の方が辛いのも、手間暇のかかることは母親に任せて自分は余りしてないことからのようである。また、「Q5-2 積極的な理由」として父親は子どもに教えたい、子どもが好き、子どもが心配がそれぞれ23から28%を占めているのに対して、母親はその理由を子どもが心配だから積極的なのだろうと推測している。これに対して、「Q5-3 消極的な理由」で母親は子どもに父親が関心が余りないとしているのが19.3%もあるのに父親はほとんど思っていない。つまり、夫は自分では子どもに関心を抱いているが、妻に任せるのがよい、仕事が忙しい、疲れる等でお相手できないと思っていて、他方母親はそうは見えていないということである（一致性の有意性がやや低いことにもあらわれている）。この互いの意識の相違は夫婦間の子どもの問題に対する軋轢を引き起こす要因となるであろう。

「Q6 父親像」では、自己評価よりも母親評価の方が頼りになるとみている。一方で自己評価では割と口うるさいと評価している。母親評価は優しいが多く、自己評価では甘いが多い。これは、甘いのを優しいととるかどうかで評価

が分かれるようである。

「Q7 母親像」は自己評価（母親自身による）では口うるさいとみているが、父親評価では頼りになるとみているのが多い。また、自己評価では父親評価よりも厳しいと思っている。というように母親の自己像は否定的なものが多いといえそうである。

「Q13 父親の状態」と「Q14 母親の状態」を較べると、明らかに父親は疲労しており、不健康であり、意欲的でなく、楽しげでない、一言でいえば、元気ない父親像、元気ではつらつとした母親像という対照的な像が浮かび上がってくる。中で「楽しげ」か否かで一致性が認められなく、父親の表向きと内面との相違を示すものとみられ注目される。両親の状態像は子どもの状態像や育児観・父親観にも何らかの影響を与えているものとも考えられるが、これについての検討は次回に回したい。

「Q16 子どもの状態」では一緒に遊ぶのが好きを除くと、一致性は高い。これは、留守がちな父親でも子どもの状態をよく把握しているということを示している。子どもの実際の姿をみているというだけでなく母親からの話しから判断している部分が相当程度あるように推測できる。言い換えると夫婦間で子どもについての情報交換がよく行われていることを示しているのかも知れない。あるいは子どもの状態像にあまり変化がないからかも知れない。いずれにせよ、この結果は障害児を持つ父親故なのかどうかは、今後の健常児との比較の中で再検討することになる。

「Q17 教育等の不安」は母親の方がやや多い。回答の具体的な内容については次報以降で紹介したい。

「Q18 相談相手」は表2に示すように全体で6.8%も相談相手がいないとしており、こ

うした父親ないしは母親は要注意である。ただ、表1に示すように相談相手がないということで両親が一致することは稀であり、必ずどちらか一方には相談相手がいるといえ、そのことが多少の救いとなっている。相談の対象はやはり夫婦互いをあげるものが多い。大きな相違は教師、医師、友人・知人であり、いずれも母親の方が多くあげている。いずれも母親が日頃接し易い対象といえる。また、父親の方が相談相手が少ないことを示している。以外なのは相談機関で、日常的に相談機関がその機能をあまり果たしていないようである。相談相手としては、今回のアンケートでは相談できる人を何人でも選択できるようにしたが、選択法にしなかったならば違った結果が得られたようにも思う。

4. 今後の課題

調査は現在も他の養護学校で実施中であり、サンプルが増えることにより結果に多少の相違の出ることが予想される。また、分析に関して、両親や子どもの状態像の良否が与える影響、家族形態、相談相手の相違、教育等の不安や心配の内容、SCT項目、性、学年効果（今回のデータでは明確な傾向は認めにくかった）、障害の程度・種別等々の影響についてサンプルが増えた段階で今回の検討も含めて再度重回帰分析等の検討を試みたい。

参考文献：

- 1) 川井尚ほか1990 育児における父親の役割に関する研究 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究（班長 平山宗宏）」平成元年度報告書 Pp.107-116
- 2) 瀬谷美子ほか 1986 障害小児をもつ母親

の育児意識 厚生省母子関係研究班報告書

- 3) 瀬谷美子ほか 1988 障害児の父親像（その1）第35回日本小児保健学会講演集 Pp.664-665
- 4) 総務庁青少年対策本部 1987 日本の父親と子ども—アメリカ・西ドイツとの比較—「子どもと父親に関する国際比較」報告 大蔵省 印刷局
- 5) 山本勝也ほか 1988 障害児の父親像（その2）—父親の生き方とその心情— 第35回日本小児保健学会講演集 Pp.666-667

表1. 両親の各質問への回答の一致性 (単位: %)

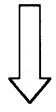
Q1 休日の過ごし方***	父	親	母	親	Q2-1子どもと朝食***	父	親	母	親
仕事の続き	4.5		3.8		ほぼ毎日	42.0		41.4	
家事を手伝う	3.8		3.8		週に3・4回	6.2		6.8	
自分の趣味母親	22.6		23.3		週に1・2回	30.2		32.7	
家でのんびり	45.9		34.6		月に1・2回	11.1		9.9	
家族と外出	17.3		22.6		全くない	10.5		9.3	
子どもと遊ぶ	3.0		8.3						
その他	3.0		3.8						
Q2-2子どもと夕食***					Q2-3子どもと会話***				
ほぼ毎日	44.0		43.5		ほぼ毎日	45.0		55.0	
週に3・4回	16.7		22.0		週に3・4回	25.6		19.4	
週に1・2回	31.5		28.6		週に1・2回	18.8		17.5	
月に1・2回	7.7		5.4		月に1・2回	6.3		3.8	
全くない	0.0		0.6		全くない	4.4		4.4	
Q2-4子どもと勉強***					Q2-5子どもとスポーツ***				
ほぼ毎日	1.3		2.0		ほぼ毎日			0.6	
週に3・4回	2.0		2.7		週に3・4回	1.3		1.3	
週に1・2回	10.1		8.1		週に1・2回	5.8		5.8	
月に1・2回	24.8		22.1		月に1・2回	26.6		18.8	
全くない	61.7		65.1		全くない	66.2		73.4	
Q2-6子どもと風呂***					Q2-7子どもと外出***				
ほぼ毎日	16.5		14.6		ほぼ毎日			1.9	
週に3・4回	12.0		9.5		週に3・4回	1.3		1.9	
週に1・2回	17.7		20.3		週に1・2回	9.5		10.1	
月に1・2回	19.0		21.5		月に1・2回	53.8		43.7	
全くない	34.8		34.2		全くない	34.8		42.4	
Q4 家族旅行***					Q5 お相手の程度***				
していない	43.2		41.1		積極的	37.8		48.4	
1・2日	24.3		27.6		積極的でない	62.2		51.6	
3・4日	15.7		18.9						
5日以上	15.1		11.9						
記憶にない	1.6		0.5						
Q5-2積極的な理由*					Q5-3消極的な理由*				
他に相手がない	2.6		2.6		子どもの年齢が高い	15.8		10.5	
妻に言われるから	2.6		0.0		妻に任せる	21.1		15.8	
妻まかせにできない	7.7		2.6		仕事が忙しい	21.1		26.3	
仕事より大事	5.1		0.0		趣味等で忙しい	7.0		7.0	
子どもに教えたい	23.1		15.4		疲れるから	15.8		10.5	
子どもが好き	28.2		33.3		余り関心がない	1.8		19.3	
子どもが心配	28.2		41.0		子どもの方が忙しい	3.5		3.5	
その他	2.6		5.1		その他	14.0		7.0	
Q6 どのような父親か*					Q7 どのような母親か**				
厳しい	8.1		4.0		厳しい	7.6		15.2	
おこりっぽい	12.1		10.1		おこりっぽい	10.6		9.8	
口うるさい	12.8		6.0		口うるさい	20.5		32.6	
優しい	27.5		37.6		優しい	16.7		12.1	
甘い	31.5		24.8		甘い	16.7		19.7	
頼りになる	6.0		12.8		頼りになる	25.8		7.6	
その他	2.0		4.7		その他	2.3		3.0	

Q 8 父親の子育て***	父 親	母 親	Q 9 母親の子育てn.s.	父 親	母 親
身の回りの世話	7. 9	4. 8	身の回りの世話	34. 3	26. 6
遊ばせる	13. 9	25. 5	遊ばせる	0. 0	0. 7
しつけをする	66. 7	57. 0	しつけをする	59. 4	65. 7
その他	11. 5	12. 7	その他	6. 3	7. 0
Q11子育ての目標n.s.			Q13父親の状態		
毎日が幸せに	33. 3	25. 5	きちょうめん***	54. 8	54. 8
健康	41. 1	30. 5	心配症***	56. 5	42. 4
子どもと楽しく	9. 2	23. 4	楽天的*	37. 4	37. 4
子どもを理解したい	8. 5	14. 9	食欲がない***	10. 8	14. 8
その他	7. 8	5. 7	熟睡しない***	39. 1	32. 8
			ゆううつ***	30. 1	25. 4
Q13父親の状態			Q14母親の状態		
疲労***	61. 6	72. 3	疲労***	24. 7	34. 1
健康**	21. 9	19. 7	健康***	78. 5	72. 1
意欲的**	41. 7	33. 3	意欲的***	78. 4	62. 3
楽しげn.s.	30. 7	32. 4	楽しげ***	65. 7	64. 0
いらいら***	36. 9	36. 9	いらいら***	40. 0	34. 7
Q15協力の仕方***			Q15協力の仕方		
仕事で	32. 2	27. 3	きょうだいのお相手	0. 8	6. 6
家族の相談相手	24. 0	30. 6	家事など	14. 9	11. 6
子どもと遊ぶ	9. 1	7. 4	特にしない	11. 6	13. 2
身辺の世話をする	2. 5	3. 3	その他	5. 0	0. 0
Q16子どもの状態			Q16子どもの状態		
活発***	24. 9	29. 3	落ちつきがない***	52. 2	47. 8
生き生き*	28. 2	25. 4	話が合わない***	53. 6	47. 5
疲れている***	18. 3	21. 7	一緒に遊ぶのが好きn.s.	33. 0	30. 1
楽しそう***	26. 4	17. 4	友達と上手に付き合***	55. 0	52. 8
怒り易い***	44. 7	44. 1	よく理解できない***	52. 8	52. 8
気分が変わり易い***	49. 7	46. 4	偏食***	35. 7	33. 5
Q17教育等の不安**					
ある	63. 5	71. 4			
Q18相談相手			Q18相談相手		
妻(夫)***	78. 5	81. 7	近所の人*	3. 7	9. 4
両親***	25. 1	26. 2	自分のきょうだい**	27. 7	32. 5
教師***	24. 6	53. 9	親戚**	17. 8	9. 9
医師***	19. 4	34. 0	その他n.s.	0. 0	1. 0
相談機関***	27. 2	24. 1	いないn.s.	0. 0	1. 0
友人・知人*	22. 0	53. 4			

注：一致性の有意水準は*** $P < 0.001$, ** $P < 0.01$, * $P < 0.05$ である。
 なお、検定は一致性で、両親間の差の検定ではない。

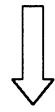
表2. 相談相手の人数(単位:人 %)

0	6. 8	6	2. 1
1	26. 2	7	2. 1
2	28. 8	8	2. 1
3	15. 7	9	1. 0
4	12. 0	不明	0. 5
5	2. 6		



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 問題及び目的

障害児をもつ家庭においては、その子どもに対して、家庭の中の誰かが密着した状態で教育・療育に関わっていく必要がでてくる。そしてその役割は、乳児期の授乳者である母親が担うケースがほとんどとなるが、母親は心理的あるいは社会的に様々な悩みや不安を抱くようになり、本来の親としての養育にも問題が生じてくる傾向がある。

こうした不安定な母子関係を取りまくなかにあって、日々の養育において母親を精神的に支え励まし、時には家庭での養育者としての父親の存在はかなり重要な位置を占めるようになってくると考えられる。

瀬谷ら(1986)は、障害を持つ子どもの母親の育児意識についての研究を行い、そこではその意識の根底には父親のあり方が深く関連していて、母親の育児行動を規定していると推測された。それから発展した障害児を持つ父親像の研究(1988)では、母親の様子を外から見守るという父親像が浮かんできた。しかし、それは父親の具体的な養育態度や、母親との関連までを対象としたものとはなっていない。また、従来の研究では父親は父親の、母親は母親のそれぞれの育児観や育児行動をたずねているものがほとんどである。これに対して本研究では父親の方にターゲットをおいて、父親は自己評価をし、母親は父親(夫)がどうであるかの他者評価を求めることにした。これにより一層、父親像が明確になると期待される。

さらに、今年度の研究では、前年度の報告から質問項目を再検討して、両親の現在の精神状態、子どもの状態、両親が子どものことで相談できる具体的な人物や人数等を質問項目に加えた。障害児を持つ父親の子育てについての父母の回答の一致性、回答の傾向を検討することにより、養育活動がどのように行われ、なにが問題になっているのかを明らかにすることを目的とした。